個としての生き方・他者の受け入れ方
―移動の時代に出された二つの宿題―

韓燕麗　准教授（映画史）

1

移民という形をした人間の肉体が次の数十年には地球上を覆うことだろう、とかつて上野俊哉は言った。グローバル化が進行し、国民国家を超えた人々が大量に出現し、情報が国境を越えてますます流動化しつつあるなかで、安定した大地の喪失と不在を体験し、複数の文化や社会の境界に生きなければならない人間はますます増えることであろう。社会学の古典のひとつとされる『故郷喪失者たち』では、「故郷喪失」あるいは「安住の地の喪失の体験」homelessnessを、近代社会と近代人に特有の状態としている。

しかし近代という時代では、国民国家が支配的なコミュニティであり、国家がつねに国民に絶対的な忠誠心と完全な同化を求める。グローバリゼーションが進むなかで、国民国家を超えたモノ、ヒト、情報があまりにも活発に流動しているために、人々の心の深層で不安や不満が募り、民族や国家への回帰指向が復活している。ナショナリズムを掲げた紛争は増加し、文化的な差異という名のもとに対立がさらに激化する傾向が軽視できなくなってきている。上記のような近代の矛盾こそが、この移動の時代における多くの紛争と葛藤が生じる源であろう。

映画を研究している私は、中国本土以外の場所に居住する中国系移民によって製作された中国語映画を研究対象としている。海外で作られた移民たちの映画を通じて、中国系移民のナショナル・アイデンティティが構築・変容される過程を探り、そのプロセスが映画作品にどのように投影されてきたのか、そして各時代の映画はそのプロセスをいかに促進あるいは阻んだのかを解明することを目標にしている。

その考察は、海外で暮らしている私自身にとっての内省の旅でもあった。中国で生まれ育ち、中国語による教育を受けた漢民族の中国人である私は、もしも日本に「移動」する機会を得られずにそのままずっと中国本土で生活を送っていたら、「中国文化・中国語・中国国籍」の三位一体の構造に合致する「中国人マジョリティ」として、その保護下にない中国系移民の現実を想像することすらできないまま、一生を終えることになっただろう。中国と日本のあいだを「移動」することによって、マイノリティとして生きること、そして自ら「中国人」だと名乗ることの意味について考える機会が与えられたのである。

2

学院留学でサンフランシスコの近郊に位置するカリフォルニア大学バークレー校に来て二か月あまり経っていた。同校はエスニック・スターディズのフィールドにおいて全米もっともレベルの高い大学の一つであり、とくにアメリカ最大のチャイナタウンがサンフランシスコにあるため、現地発行の古い中国語新聞は、たいがい図書館に所蔵されている。中国系移民がサンフランシスコで行った映画製作について調査する私にとって、まさにこの上なく完璧な環境である。

図書館の地下にあるマイクロフィルムの閲覧室で、１９２０年代から１９４０年代の新聞を映し出すモニターと毎日睨めっこしているうちに、80年以上前の中国系移民の生活ぶりが如実に目に浮かんできた。１８８２年から１９４３年まで続いていた「中国系移民排斥法」による制限で、中国系移民はアメリカ国籍を取得でき

ず、中国にいる家族をアメリカに呼び寄せることも困難だったため、中国系移民のコミュニティは長い間、男性独身社会（Bachelor Society）と呼ばれていた。新聞の現地ニュース欄から、初老の独身男性が自力で病院に辿りついた直後に衰弱死したなどの記事を目にすると、故郷から遠く離れ、異境の地で孤独に暮らした移民たちを不憫に思わずにいられなくなる。

薄暗い図書館から一歩出れば、カリフォルニアの燦々とした太陽の下で様々な肌色をした学生たちが楽しそうに喋りながらキャンパスを歩いている。時にはタイムスリップしたような気分にすらなる。中国系移民が明らかな差別を受けていたあの時代から80年以上も経った今日のサンフランシスコでは、人種構成が多様でアジア系住民も多く、一般に全米で最も差別が少ない地域と言われている。じっさい、テレビをつければ、有料の衛星放送ではなく無料の中国語チャンネルがあり、中国スーパーに行けば、神戸の中華街でも売っていない珍しい中国野菜から薬膳スープを作る漢方食材まで、なんでも手に入れられる。同じような驚きは、近所の日本スーパーに行った時も味わった。納豆と味噌はそれぞれ10種類以上もあり、三宮の大手スーパーにも負けない品揃えである。

日本での暮らしを不便に感じたことはなかったが、それでもここアメリカの西海岸で中国あるいは日本本土とほぼ変わらない品物とサービスが提供されることに感心した。半世紀以上前のかつてのひどい状況が分かっているからこそ、「さすが移民の国だね」という一言で簡単に片づけることができない。日本にも数多くの中国人が住んでおり、かつ地理的にはるかに近い。しかし「日本風」の中華料理しか食べられず、本場の調味料や漢方薬は香港か大陸から調達しないといけないのはなぜだろうか。

3

近代の支配的なコミュニティである国家は、つねに国民に国家に対する完全な忠誠と同化を求める。半世紀前に中国系移民のアイデンティティが構築されていったプロセスは、ある国家の国民という同一性を超えたあり方を模索する自分に、新たなアイデンティティを把握するための座標軸を提供してくれるのではないか、という野望をひそかに持っていた。しかし半世紀以上も前の中国系移民はこの近代の呪文から逃れることができなかった。映画のテクストから分かるように、アメリカ合衆国であれ、中華人民共和国であれ、あるいは中華民国であれ、中国系の移民たちはつねに安定したナショナル・アイデンティティを求め、つねに国家という共同体の一員になろうと努力していた。

あれから80年間もの歳月が過ぎ去った。今日では、国民国家を超え、複数の文化や社会の境界に生きなければならない人間はますます増えつつある。『華僑――落地生根から落葉帰根への苦悶と矛盾』の著者である戴国煇は、自らは「インディペンデント・チャイニーズでありたい」と言う。それは、何のイデオロギー的先入観もなく、自分をある国の国民としてよりも、一人の個人として見てほしいという悲願にほかなるまい。移動の時代に生を受けたわれわれは、中央集権的な国民的アイデンティティへの同化に埋没せず、「個」としての生き方を模索する機会をついに手に入れたのである。20世紀を通してわれわれを縛り付けていたナショナル・アイデンティティから解放される可能性を探求することが、すべての個人にあたえられた課題ではなかろうか。

一方、多文化社会の中でともに生きることは、他者への敬意が必要不可欠である。他者というのは、国籍のみならず、民族、言語、宗教、性差、性的指向、障害歴、年齢差など、さまざまな意味において多様な社会的背景をもつ人々を指す。敬意というのは、自らと異質なものを異質なまま受け入れることだと、私は理解している。

日本とアメリカの違いについてぼんやりと考えていた時に、所属している東アジア研究所の日本研究センターから、講演会でコメントを述べてほしいという依頼が来た。大阪大学の「未来共生イノベーター」というプログラムについての講演であったが、日本で長年暮らしていた中国人として出席して発言することが求められた。「未来共生イノベーター」というプログラムの理念に大いに触発された。同校のホームページに、下記の紹介文があった。「本プログラムは、他者と他者とが互いに認め合い、助け合い、高め合い、新たな価値や利益を生み出すことができる、創造的で発展的な共生社会を目指します」と。理想論と思われるかもしれないが、それが明るい未来へ通じる唯一の道ではなかろうか。

自らと異なる他者に、気持ちの悪い異質なものというラベルを貼らない、目をそむけない、そして同化しようとしないことは、決して容易なことではない。しかし、多様な社会的背景を持つ人々が様々な文脈の中で接触する機会が増加しているこの移動の時代に、他者の受け入れ方についてゼロから学習することが、新しい時代がわれわれ全員に出したもう一つの宿題だと思う。